

依頼論文

朝鮮学校で学ぶということ

山本 かほり 愛知県立大学教授

キーワード：在日朝鮮人，朝鮮学校，アイデンティティ

本稿の目的は、愛知朝鮮中高級学校でのフィールドワークおよび関係者へのインタビュー調査から、当事者たちにとって朝鮮学校がもつ意味を描き出すことにあり、朝鮮学校の生徒たちの「明るさ」の背景にあるものは何か？ それを考察することを通じて「朝鮮学校に通うことに意味」を探ったものである。

朝鮮学校では、朝鮮語、朝鮮歴史、朝鮮地理、現代朝鮮歴史などの「民族科目」を基盤にしつつ、「朝鮮人の育成」を目指している。学校では、生徒たちは、幼少期から朝鮮舞踊や朝鮮の歌、朝鮮の楽器に触れる機会も多く、日常的に朝鮮人に囲まれて成長していくという経験を通じて、「自分は朝鮮人なのだ」という肯定的なアイデンティティを自然に培う。また、朝鮮学校は在日朝鮮人が困難な歴史を乗り越えて作り、守ってきた学校であるという歴史も共有されている。その中で、強い仲間意識（朝鮮学校コミュニティ）が形成され、非常に濃密な関係の中で、守られるようにして朝鮮人として育っていくことを明らかにした。

さらに、現在、日本社会が朝鮮学校を批判するときの「攻撃的」としている朝鮮との関係、学校関係者にとって、朝鮮がどのように認識され、とらえられているかも明らかにした。

1 はじめに——朝鮮学校を研究ということ

ここ4～5年、日本社会の朝鮮学校をとりまく社会的環境は厳しさを増している。いわゆる「高校無償化」制度からの排除、それに連動するように、朝鮮学校に対する補助金の支給を停止する自治体が続出¹。2013年4月には、町田市が市内の小学生に貸与している防犯ブザーを朝鮮学校の子どもたちには貸与しないという通知を出し、その後、市民からの抗議をうけ撤回したという事件もあった。このような決定を下すときの政府もしくは自治体の説明は「朝鮮学校は北朝鮮と関係がある。そのような学校に公的な援助をすることは国民（県民／市民）の理解が得られない」というものだ²。

朝鮮民主主義人民共和国（朝鮮）が日本人拉致を認めて以来、日本社会は激しく朝鮮をバッシン

グしている。「北朝鮮」といえば、無条件「悪」だとする社会的雰囲気の中で、朝鮮学校がこれまでの獲得してきたわずかな権利も奪われていっている。

朝鮮学校を批判する立場をとるメディアは、朝鮮学校が在日本朝鮮人総聯合会（総聯）と朝鮮（「北朝鮮」）と密接な関係を持つことを痛烈に批判する。そして、まるで、朝鮮学校が「思想教育」の拠点であり、朝鮮の政治体制、社会体制を盲目的に「礼賛」している「おかしい」学校であるかのようなイメージを提示する。「拉致をして、ミサイルを打ち上げ、核実験を行う危険な国＝北朝鮮」を正当とみなし、そこと関係を持つ朝鮮学校に、高校無償化制度の適用や自治体の補助金を支給することは正しくない³と論じる。

逆に、朝鮮学校を擁護する立場をとるメディアの論調は、概して、朝鮮学校と朝鮮との関係が「希薄化」していることを強調する。生徒たちの国籍の多くが「韓国」であること、また、確かに以前は、北側の思想的な教育を施していたが、現在の教育内容は日本の学校のカリキュラムと大差がないと強調する。そして、朝鮮学校に子どもを送る親たちも「北朝鮮支持」ではないと主張する。つまり、日本社会にとっても「理解可能」な学校だから、高校無償化制度から排除したり、自治体の補助金をカットすることは妥当ではないと主張する⁴。

朝鮮学校を批判するにしろ、擁護するにしろ、朝鮮との関係は否定的にしか捉えられていないことが読み取れる。しかし、朝鮮学校でフィールドワークをしていると、朝鮮学校と朝鮮との関係が、批判的な立場のメディアが主張するような「従属的」でダークなものでないことはもちろん、擁護する立場が主張するように、簡単に朝鮮との関係が「希薄化」していると言い切れるものではないことも、すぐに実感を伴ってわかるようになる。

確かに、1970年代、80年代と比較すると、朝鮮学校の教育内容はずいぶん変わったようだ。端的に言えば「思想教育」的な内容はずいぶん減ったという。それは、在日朝鮮人たちが自らの生き方を考えて、自分たちで変えてきたものである。しかし、朝鮮学校がもつ政治的な立場——朝鮮半島にある二つの分断国家のうち、北側の朝鮮民主主義人民共和国を正当な国家としてみなす——は堅持されている。したがって、それとは対立する立場、つまり南側の大韓民国（韓国）を正当な国家としてみなしている日本において、私たち研究者が朝鮮学校をどう語ろうと、そこに一種の政治性がついて回るという困難が存在している。

大阪の朝鮮学校で長期のフィールドワークを行った韓国人の宋基燦も、『語られないものとしての朝鮮学校』（2012）で、韓国人として朝鮮学校で調査をする自身のポジショナリティの説明に、相当紙面をさいている。

私自身にも、これらの「困難」に対処すべき言葉はいまだ見つかっていない。しかしながら、本稿では、2年あまりの愛知朝鮮中高級学校（愛知中高）でのフィールドワークをベースに、朝鮮学校関係者にとっての朝鮮学校の意味を描いてみたい。そのことを通じて、在日朝鮮人に対する日本の政策課題、ひいては、広く外国人の教育に対する政策的な課題を考える一助になればと思っている。

2 調査について

(1) 調査の経緯と概要

朝鮮学校を調査研究するきっかけになったのは、前にも少しふれた「高校無償化」からの朝高排除だった。大学院時代から、在日朝鮮人に関する調査研究を行っており、朝鮮学校の権利問題にも関心を持っていたので、その適用を求める活動に関わりはじめた。これが、現役の朝高生たちに出会ったきっかけだ。

朝高生との出会いは「新鮮」だった。「こんな在日の子たち、会ったことない」というのが、私の第一印象である。生徒たちは底抜けに明るかった。その後、何度も朝高生たちに会うことになったが、かれらはいつでもどこでも明るく、元気に見えた。

「学校が好きだから」「学校を守らないといけないから」と言いながら、「高校無償化」適用を求めて、何度も街頭に立つ朝高生たちの姿を見ながら、かれらのこの「明るさ」の正体は何だろうか？と考えるようになった。また、かれらが「守る」という「民族」「学校」の中身は何だろうか？さらには、60年を超える民族教育の歴史の中で、朝鮮学校が継承してきたもの、または変容させてきたものは何だろうか等々、様々な問いが頭に浮かぶようになった。

そこで、愛知中高に依頼をして、2011年9月頃から週一回のペースで参与観察をさせてもらうことにした。それまでに、無償化問題を通じて、ある程度のラポールは形成されていたので、愛知中高に定期的に出入りする事の承諾をとることは難しくなかった。

参与観察では、授業時間、休み時間、放課後など自由に教室に出入りさせてもらい、生徒の様子を観察している。また、職員室にも出入りさせていただき、休み時間や放課後に教員たちとの会話を交わすこともある。また、数多い学校行事（運動会、文化祭、そのほか課外活動）にもなるべく参加することを心がけてきた。さらには、高3の「祖国訪問」と呼ばれる朝鮮への修学旅行の同行調査も2012年と2013年⁵⁾に実施した。

また、愛知朝高学区の初級部（愛知県内4校、岐阜、四日市、長野、静岡、北陸）の行事にも可能な限り足を運び、中等教育前の初等教育段階における民族教育も観察している。

このような参与観察のほか、朝鮮学校に子どもを送る保護者（今のところ、全員が朝鮮学校出身者）、愛知中高の卒業生、教員等、これまで合計22名へのインタビューを行った。

これらのフィールドワークを通して、内在的に朝鮮学校を理解することを心がけた。日本社会が否定的に捉えている朝鮮との関係（その象徴である朝鮮の指導者の肖像画まで含めて）が生徒や保護者たちにとって持つ意味も内在的に捉えたいと考えている。

本稿では、フィールドワークから見えた「朝鮮学校での青春」の一部を描きだしてみたい。その作業から、朝鮮学校に通うということが、当事者たちにとってどのような意味をもつものなのか、朝鮮学校が当事者たちにとってどのような空間なのかを考察してみたい。

なお、本稿では私が「民族関係研究会」（関係研）の共同研究の一員として行った「在日韓国朝鮮人の家族親族単位の世代間生活史調査」のデータも補足的に一部使用する⁶⁾。

(2) 調査地概要—愛知中高について—

まずは、愛知中高について、簡単に説明しておこう。

愛知中高は名古屋市に隣接した愛知県豊明市に所在する。2013年に創立65周年を迎えた中部地区の民族教育の中等教育機関だ。運営母体は学校法人愛知朝鮮学園である。愛知中高は、中級部は愛知県内4校の初級学校（名古屋、東春、第七（瀬戸）、豊橋）を学区とし、高級部は愛知、岐阜、四日市、静岡、北陸の5つの中級部を学区としている。高級部には、自宅から通学できない生徒のために寄宿舎も用意されている。

創立当初は名古屋市内にあったが、1961年に現在地に移転、1973年に鉄筋5F建ての現校舎を建設した。校舎は築40年、老朽化が目立つことは否めない。

学校法人・各種学校認可は1967年であり、現在の生徒数は、中級部約140名、高級部約170名である。ピーク時の1970年代には総勢1500名を超えたというので、現在は1/3程度までに減少していることになる。これまでの卒業生の数は累計で1万4千名余りである。生徒の国籍は朝鮮、韓国、日本籍であり、全員朝鮮半島に何らかのルーツをもつことが入学資格の必須条件となっている。

愛知中高の運営状態は、全国全ての朝鮮学校と同様に、非常に厳しい状況にある。生徒数の減少が直接的な原因である。減少の背景には、少子化による自然減に加え、近年の日朝関係の悪化、特に2002年の拉致問題発覚以降、総聯から距離をおく在日朝鮮人も増えはじめたことがある。また、在日朝鮮人の世代も4世、5世となるなかで、民族教育の必要性を感じないという親たちも増加している。愛知県内でも初級学校、中級学校の統廃合を行いながら、運営を続けているが、経営状態は厳しさを増す一方のようだ。

さらに、日本経済の悪化にともない、在日朝鮮人からの寄付も減っているという。朝鮮学校は各種学校であるために、国からの私学助成を受けることができず、公的な補助は愛知県からの補助金のみである。ただし、その額は生徒一人あたり年間35000円で、私立学校の生徒の1/10程度の金額しかない。したがって、同胞からの寄付の減少は、学校運営には大きな打撃なのだ。

この結果、教職員の待遇も悪化、給料の遅配、未払いが恒常的な状態となっている。民族教育を担っていききたいという気持ちがあっても、結婚などを機会に転職するケースも多く、教員の年齢層は20代の若手と50代以上のベテラン層が中心で、30代、40代の中堅層は少ない。教員の数も最低限しか配置できないために、教員一人ひとりの負担も相当重いのが現状である。

3 調査から

上述のような厳しい状況は全国の朝鮮学校が直面している。「常識的」に考えれば、「存続不可能」な状態まで追い込まれていることは紛れもない事実だ。ギリギリの状態で「持ちこたえ」続けているのだ。何がそれを可能にしているのか？それは、教職員の献身的な働きはもちろんであるが、保護者たち、そして生徒たちも学校を支えているからだ。「ウリハッキョ（私たちの学校）を守ろう！」と、それぞれが懸命に学校を支える。こんな朝鮮学校とは当事者にとって、どんな存在なのであ

うか？ 保護者と生徒（卒業生も含む）たちの視点から描き出してみたい。

(1) 保護者たち

朝鮮学校でのフィールドワークを本格的に開始するにあたって、愛知中高での参与観察とともに、保護者へのインタビューも調査の柱においた。それは、これだけ日朝関係が厳しく、朝鮮学校や総聯への風当たりも強い今、どうして子どもたちを朝鮮学校に送っているのだろうか？ 朝鮮学校に何を期待し、また、子どもたちの進路選択、職業選択への展望をどのように考えているのかという点について関心をもっていたからである。

中島は保護者へのインタビュー調査を通じて、学校選択理由を明らかにしている。朝鮮学校出身の保護者の場合は「当たり前の選択として」「安心できる場所として」朝鮮学校を選択し、日本の学校出身者の親の場合は、自身が民族的アイデンティティの葛藤をした経験から、子どもには朝鮮語や文化などを自然に獲得できる朝鮮学校を選んだという答えを導きだしている（中島、2011）。

私の調査でインタビューした保護者は12名、7名は朝鮮大学校を、残り5名も朝高を卒業した人たちであった。また、2名を除いて、初級学校1年生から朝鮮学校での教育をうけた（一名は初4で編入、もう一名は高校から編入）。なお、ここに記す年齢はインタビュー当時のものである。

中島の研究結果と同様に、みな、異口同音に子どもを朝鮮学校に送ることは「当たり前の選択」だったと語る。本人も配偶者も朝鮮学校出身者だったので、日本人の保護者が近所の小学校に子どもをいれるように朝鮮学校を選んだというのだ。「子どもを朝鮮学校にいれるのが当たり前だと思っている人と結婚しようと思っていたし、結婚後、家を探すときにも、子どもが朝鮮学校に通えることを第一条件に探した」（Aさん、47歳・3世・女）とか「チョソンサラム（朝鮮人）だから、チョソンサラムとして育てるためには、ウリハッキョしか考えられなかった」（Bさん、45歳・3世・女）などと理由を説明する。

「高校無償化」適用を求める裁判⁷での意見陳述でも、一人の原告の母親は次のように述べた。

「ただ子どもたちにオンマ（お母さん）と呼んでもらいたい、ウリマル（私たちの言葉＝朝鮮語）で挨拶しウリマルの歌を歌い話す我が子であったほしかった、実際に（そうになっていく）そんな子どもが可愛くてしかたありませんでした。」（『とり通信8号』⁸）

もちろん、中には、中学や高校進学段階で、日本の学校に移りたいと考える子どももいる。実際にインタビューした人の中には、高校から子どもを日本の公立高校に通わせた人もいた。しかし、その親も含めて、できることならば高校まで朝鮮学校で民族教育をうけることが望ましいと言う。

「みなさんが、小学校、最低、中学校まで、ウリハッキョに行っていれば、もうイルボンハッキョ（日本の学校）で大丈夫だよって言われるんですけど。ベースができてるって言われるんですけど。私はちょっと違って、高校3年間というのが、すごく大事なことのよう気がしてるんですね。結構、中学校から日本の学校に行っちゃう子たちがたくさんいるんですけど、その子た

ちが今も在日の子どもたちと輪を保ててるのかというと、やっぱりみんな離れていってしまって、なかなか連絡しづらいとか。世界が全然、違ってくるんですよね。それが悪いというんじゃないんだけど。そこで絆がしっかりしてれば、社会に出て、困難なことがあったときにでも、頼れたり、力をもらえたりっていう、自分が“素”に戻れるところに、いつでも帰れるような場所を作る、その期間が、最低でも高校までは必要じゃないかなって、私は思うんですよ」（Cさん、47歳・3世・女）

つまり、朝鮮学校に期待するのは、「朝鮮人としての自覚」や「朝鮮人としてのアイデンティティの形成」というものだ。自分自身も朝鮮学校に通い、朝鮮人としての自覚をもつようになり、今でも朝鮮人として生きている、自分の子どもにそうなってほしいという感覚なのだ。

さらに、Dさん（58歳・2世・女）は朝鮮大学校まで子どもを進学させたかったと語る。その理由は次の様だ。

「大学までは、いろんな学部があるから、どこ行くにしろ朝鮮大学に入ってほしいと思いましたね。そういう…朝鮮人のコミュニティっていうか、それもすごい、私は重要視してるので。私はね、学歴はね、あんまり当てにならないなあと思ってるんで」

朝鮮学校で朝鮮人同士のつながりをつくってほしい、朝鮮人コミュニティの中で居場所をみつけてほしいと願っていることがわかる。在日朝鮮人⁹の世代が進む中で、日本社会の中では在日朝鮮人同士の関係形成の困難が指摘されるようになって久しい。確かに、在日朝鮮人の集住地以外の日本の学校で、朝鮮人同士が会えることは困難だ。たとえ、在日朝鮮人の生徒が複数いたにしても、日本人生徒の中にまぎれてしまい、朝鮮人同士としての出会いは困難であろう。このような現実の中で、親は朝鮮人社会の中で子どもを育てることを重要視して、子どもを朝鮮学校に送っているのである。

しかしながら、「朝鮮人だから朝鮮学校に行くのは当たり前のこと」として、朝鮮学校に子どもを送ってはいるが、経済的負担は相当ある。まずは、義務教育段階では公立学校では不要な授業料がかかる。通学費などを合わせて、平均2万5千円程度だという。高級学校段階では、一般的な私立高校と同程度の費用で、月平均4～5万円のようなのだ。

また、朝鮮学校が少ない地域では初級部1年生から長距離通学となる。例えば、長野の朝鮮学校は松本市内にあるが、上田、長野あたりから通学している子どもも少なくない。スクールバスが運行されており、1時間半から2時間の通学路だという。また、静岡の朝鮮学校に子ども3人を送ったある親は「初級の時は、JRの高速バスで通学させていたんですね。その方が楽だから。でも、高速バスは学割がないから、月10万円ほどかかったんです」と話す。3人同時となれば30万円の通学費ということになる。しかし、彼は経済的負担以上に「夕方、高速バスの停留所まで子どもを迎えに行くと、まだ小さな子どもがぐっすり寝入ってしまい、起こしても起きないんですね。その子どもを抱きかかえてバスから降ろす時に、俺のこの選択は正しいのかなあと思ったよ」と、親と

しての精神的負担があったことを語っていた。

これに加え、父母は学校を支えるためのボランティア活動にも積極的に関わる。たとえば、キムチなどの朝鮮料理販売、配達などが定期的に行われ、収益は学校に寄付される。愛知中高のオモニ会（母親会）は行事ごとに売店をだす。例えば、キムパップ（海苔巻き）販売。その数は600本。材料の調達、下準備、料理、包装、販売まで全てオモニたちによって行われ、その売り上げの多くを学校に寄付している。相当な負担のはずだ。そこまでして、学校を支え、子どもたちに民族教育を受けさせようと頑張る背景には、保護者自身の朝鮮学校体験がある。

Eさん（46歳・3世・女性）は初4から朝鮮学校に編入した。小3の夏休みに通った「夏期学校」という朝鮮人の子どもたちに朝鮮語を教える講座に通ったことがきっかけで、自ら、朝鮮学校に行きたいと希望したという。そして、初4の4月から朝鮮学校に通いはじめたのであるが、その時の思い出を次の様に語る。

「今でも覚えてるんですけど、学校のバスが、朝、来ました。母がそこまで送ってくれました。弟と手をつないで、入学式だったんです。学校に行きました。そうしたら、みんな、チョゴリを着てますよね。真っ白の校舎で、2階建てで、窓の所に鉄柵があるんです。そこがちょうど鉄柵になってて、みんながこっち覗いてて、手を振ってくれる。だれも知らないのに、こんなに温かく迎えてくれるんだーという感じで。小学校にだいたい40人ぐらいいたのかな。みんながね、すごく優しいというのか、うん。そのとき思ったのが、ここ、私がいる場所だっという感じがしたんですよ」

Eさんが日本の学校で特に差別を受けていたわけではない。むしろ、経済的には裕福な家庭に育ったので、周囲の日本人からも一目おかれていたという。しかし、「何か違うな」という感覚だけは持っていたという。何かわからないけれど、違うという感覚の「何か」は朝鮮学校に行ってわかったとも語る。

「何が違うというのは、このことだったのかなあって気づいたんです。自分で。だから、よく言うじゃないですか。水を得た魚、そんな感じなんですよ。あと、私が居れる場所がある、私が居れる場所がここだという感じで。なんか汲みとったというか、感じとったというのか」

また、高校から朝鮮学校に編入したDさん（58歳・2世・女）も、中学時代は自分が朝鮮人であることで悶々としていたが、高校から朝鮮学校にはいつのびのびと過ごすことができたという。

「思春期だったから…。なんか中学は楽しくなかったですね。（自分が朝鮮人で）みんなと違うってというのがいやだったんですね。だから、高校（から朝鮮学校で）、楽しかったですね」

つまり、DさんもEさんも、朝鮮学校に転入して、居心地の良さを感じたというのである。日

本の学校で直接的な差別体験はないが、周囲の日本人と自分は違うということ＝朝鮮人であることを肯定的には受け止められずに違和感を感じていたが、朝鮮学校に編入して、その感覚から解放されたということである。

他の保護者たちも一様に楽しかった学校体験を話す。たとえば、Fさん（3世・49歳・女）の思い出は次のようだ。

「(学校は) パラダイスみたいなおとくでしたよね。楽しいし、やりたい放題で。先生とも基本的に仲いいし、友だちとも仲が良かったし。付き合いが濃密なので。充実してるっていうか。学校に来なかったら、女の子だったら、家に行って。私も行きましたよ。三日も休んでる子と呼ばに。出席率100パーセント運動とかやるんです。100パーセント運動、あと、10日で達成なのに、休んだりするヤツがいて、電話しても出ないっていうんで、友だちと一緒に行って、あいつを明日連れていくよ、みたいな感じで。私も、それで行ったんですけど、夜、遅くまでいて、その子の家に泊って、夜通しおしゃべりして、私も寝坊して、休んじゃったんですよ」

映画『パッチギ!』（井筒和彦監督、2004年）を連想させる話であるが、当時の朝鮮高校では、こんな日常が流れていたという。ほかの保護者たちの体験談も類似のものが多。学校の勉強はとにかく、学校の仲間と一緒にいるのは楽しかったというものだ。そして、その楽しかった学校生活を自分の子どもにも送らせてやりたいとも言う。

この「楽しさ」を支えるものに、朝鮮学校内の親密な人間関係がある。多くが幼少期から同じ学校で過ごし、大人になってからも、今度は保護者同士として、お互いの子どもまで含めてつきあいが続く。そして、これは全国的な広がりをもつ。韓が「朝鮮学校コミュニティ」（韓、2006）と呼んだ朝鮮学校を核とした朝鮮人同士の人間関係の中にいることの良さを保護者たちは大事にし、子どもたちもその中で育てていきたいと考えているようだ。そして、そんな学校を支えるために、保護者たちは熱心に活動する。これは今の保護者世代が子どもの頃から行われている。1970年代から80年代に4人の子どもを朝鮮学校に送った母親も次のように語った。

「(学校には) お金がないから、バザーなんか（やるとなれば、参加した）。子どもが4人いてたら、いろんな役員もさせられますしね。（それまでは総聯や学校との関係は）もう、全然（ない）。学校も自分の子どもが行って、初めて行きましたし。はたで（見ているだけの）分らない時は、ぱつと（表だけ）見たら、文句（も出る）。規模は小さいし、学校は小さいし、頼りないし。（しかし）やっぱり批判する前に、自分が子ども入ると一生懸命良くしていかなあかんていうことになりますから。それで、私らの学校は、親も子どもも、一生懸命、一緒にして大きくならないとあかんと思いましたし。ほんで、子どもがやっぱり明るいですしね。で、先生はすごく一生懸命ということだけは、誰にも負けない。だから良かったな思いますね」

それでは、朝鮮学校がもつ政治的な立場やそこに関わる教育についてはどのように考えているのだろうか。「思想教育」だと日本社会が朝鮮学校への批判のターゲットにしている部分だ。保護者たちの朝鮮本国に対する意見や態度は、肯定的な人から批判的な意見を述べる人まで様々である。しかしながら、朝鮮学校における朝鮮本国に関する教育をどう考えるかという点にはついては、「子どもたちが成長の過程で自らが判断すること」と考えている。たとえば、Aさんは次のように語る。

「それ（日本の報道と学校での教育のズレ）は自分で感じればいいから。家でも日本のマスコミがそういうことを悪く言ったときに、そこまで悪く言われると腹が立つし、でも、面白い国だよ、変な国だよって普通に話してみたり。あの学校に入れることは、思想教育をしてくれるということが分かっているから、そういう道に彼らが行くんだ、それが正しいんだと感じたら、行けばいいし。自分で考えて、おかしいなと思ったら、他に選択肢いろいろあるから、考えればいい」

また、自分たちが朝鮮学校に通っていた頃は、今とは比較にならないほど「（北）朝鮮一色」の教育だったし、そこで教えられることは当たり前のこととして受けとめてきたが、成長の過程で、自分たちなりに疑問をもち、整理をして、消化してきたともいう。また、学校が提示する「公式」見解に、生徒として自分たちなりの「抵抗」なり「相対化」もしたともいう。金漢一によるエッセイ『朝鮮高校の青春——ボクたちが暴力的だったわけ』にも、生徒たちが、学校が教える「公式見解」にいかに対応していたかが面白おかしく紹介されている（金、2005）。したがって、学校にいる間は、学校を通じて教えられる朝鮮、高3の「祖国訪問」などで子どもたち自身が自分の目で見て肌で感じとる朝鮮を十分に学べばいいと考えてるようだ。なぜなら、学校の一步外にいれば、日本社会で流される朝鮮に関する情報も当然受け取るので、それらと学校での情報を総合的に判断する力を子どもたちは持っているからだという。そして、学校での教育や公式見解をそのまま受け止めて生きていくのも、あるいは、逆に、疑いをもって異なった道を進むのも、子ども自身が判断し選択していくことだというのである。親として、重要視しているのは、子どもが朝鮮人として育つことと朝鮮人同士のつながりをもつことだと強調する。思想的、政治的な部分は「オプション」だとも言う。

「あの学校にいれるということは、思想教育もオプションでついてくるってこと。でも、朝鮮人であることを教える、それがゼロの日本学校と、どちらを選ぶかって言われたら、思想教育もついてくるウリハッキョを選ぶ。私もだんなも、子どもの頃から、もっとすごい思想教育を受けてきた。でも、この社会でちゃんと生きていけるから」（Aさん）

板垣が同志社大学で自身のゼミ生と行った京都朝鮮第3初級学校の保護者を対象としたアンケートでも、子どもを朝鮮学校に通わせている理由として、「朝鮮民主主義人民共和国を支持しているから」という政治的立場をあげている保護者は少ないという結果がでている（板垣、2013：174）。この調査でも、朝鮮語習得、朝鮮人としての誇り、朝鮮人同士のつながりなど、日本の学校では得る

ことができないものが上位にあがったという（板垣、2013：174）。

もちろん、保護者たちにも学校に対する多くの不満や批判はある。しかし、保護者たちは自分たちの経験から、自らの存在を否定されることなく、安心していることができる朝鮮学校の大切さを認識している。インタビュー中のCさんとGさん（45歳・3世・女）の会話もそのことをよく表している。

C「自分たちがいちばん強い、みたいな。チョゴリ着ても、いまは何かされないだろうかという怯えながら着るっていう感じがあるけど、私たちは、どんなもんだいっていうぐらいの勢いがあったっていうか」

G「胸、張って」

C「誇らしく。そこにいると、もっと強くなれるっていうか。なんか、安心感でしょうね」

チマチョゴリの制服に守られるようにして、日本社会からの攻撃も恐れずにすんだ、そんな安全な空間として朝鮮学校をとらえている。だからこそ、単に受け身で子どもを学校に送るのではないのだ。ここで述べたように、保護者たちの有形無形の支援が学校を厳しいながらも存続させている要因の一つである。

(2) 生徒たち

それでは、現役の生徒たちにとって、朝鮮学校はどのような存在なのだろうか。現在、愛知中高に通う生徒は約300人弱、もちろん、学校に対する距離は個人それぞれだ。しかしながら、保護者たちが「楽しかった」と語る学校生活が想像できる雰囲気为学校には残っている。

その背景には、やはり、朝鮮学校が一つのコミュニティとして機能していることをあげられる。「在日朝鮮人」として、同じ歴史的な背景を共有する仲間たち、教職員、そして保護者たちに囲まれ、朝鮮人であることを理由に自身を否定されないで育つ、そして、その多くは幼少期からの顔なじみであるという事実。現職の教員も、朝鮮学校出身者であり、今の保護者が教員の教え子であるということもよくある話である。

コミュニティ内部で共有している歴史や物語、個人生活史があり、生徒たちもその中で安心して過ごすことができるという感覚をもっているようである。このコミュニティの存在は、具体的には学校行事などで体験される。運動会や文化祭では、多くの同胞が集まり、自分の子どもであろうが、他人の子どもであろうが、関係なく声援を送る。また、運動会の昼食時間は、地域ごとに区切られたテントの中で、生徒たちは同じ地域に住む同胞たちと盛大な手作りのお弁当を食べる。このように、生徒たちも幼少期から、在日朝鮮人同士の濃密な人間関係の中で育ち、その良さを実感し、「好き」で「離れたくない」と語るようになるのである。

「在日朝鮮人の社会がめっちゃ好きなんです、僕たち。（私：なにがそんなにいいの？）人付き合いじゃないですかね。楽しく、普通に楽しいことばっかあるし。本当に…単純に面白いんで。だから、在日朝鮮人の社会がめっちゃ好きなんです。だから、死ぬまで一生、朝鮮の名前で生

きていくと思います」(19歳・4世・男・朝大1年)

インタビュー当時まだ19歳の青年が「めっちゃ好きだから離れたくない」と語る「在日朝鮮人の社会」は、そのまま、朝鮮学校を核とした在日朝鮮人たちのコミュニティなのだ。当事者たちは「温室」だとも言うが、確かに、そこは、日本社会の不安要因から自分たちを守ってくれる場所なのだ。「高校無償化」排除をめぐる裁判でも、愛知中高の卒業生は次のように意見陳述をし、朝鮮学校の意味を述べている。

「ウリハッキョ(朝鮮学校)に通う子たちは同じ民族なんだ。当時、私はそう思うだけで幼いながら安心感を覚えました。今思えば、私が感じたこの安心感は、間違いなく日本国内に漂う在日差別や排外主義から自分を守ってくれる場所を見つけたところからきていると思います」(『とり通信7号』)

前項でみた日本の学校から朝鮮学校に編入した保護者たちが感じた「安心感」を、約40年が経過した現在でも生徒たちが感じなければならないという日本社会の現実を読み取ることができるだろう。

しかし、生徒たちの日常は、おそらく今の日本の学校に通う10代の若者たちのそれと大差はない。学校内の先輩―後輩関係における愛知中高内で代々引き継がれてきた、外部者から見ると「意味がない」ように見えるルール¹⁰を忠実に守りながら、朝の登校をし、一日の授業をこなし、そして小組(ソジョ)と呼ばれる部活動に熱中する。「帰宅部」の生徒もいて、かれらは学校から許可ももらってアルバイトに専念したり、学校外での趣味に夢中になったりしている。

授業も民族科目(朝鮮語、朝鮮地理、朝鮮歴史、現代朝鮮歴史)以外は、日本のカリキュラムと大差はない。(もちろん、授業は全部朝鮮語で行われているし、音楽では朝鮮の歌や曲を学ぶことができる。課外活動では朝鮮の民族楽器や舞踊を学ぶこともできる。)授業中の雰囲気も、教員と生徒の距離が近いせいか、相互作用は活発だが、その内容に退屈していたり、居眠りをしていたり、「内職」をしている生徒がいるのは、どこにでもある学校の風景である。「先生、あと15分しかないから、残りの時間は自習にしましょう!」(45分授業だから、まだ1/3残っていることになるのだが)などと言って、教員を苦笑させている姿は微笑ましくもある。

しかし、日本の学校の生徒がおそらく考えたこともないことを、朝鮮学校の生徒たちは意識している。ある種の「使命感」をもっているようにも見える。それは、「ウリハッキョを守る」ということだ。「守る」という言葉の裏にあるのは「学校がなくなるかもしれない」という危機意識だ。学校が直面している財政難とともに、過去から現在に至るまで経験している日本社会からの政治的困難(当事者たちにとっては「弾圧」)を生徒たちは認識しており、学校が閉鎖におこまれるかもしれない、だから守らないといけないという意識をもっている。

朝鮮学校に対する「弾圧」の歴史的な研究はこれまでも多くの先行研究があるので、詳細はそれらにゆだね、概略だけ記しておく。朝鮮学校は1945年8月の日本の植民地支配からの解放直後、

朝鮮語を教える「国語教習所」として発足以来、今日まで日本政府からの支援は全く受けることなく続いてきた。大きな「弾圧」は1948年と1949年のGHQと日本政府による「改組令」や「閉鎖令」、そして、さらには1965年にも朝鮮学校を学校として認めないという内容の通達である。当然、国庫からの補助金は一切ない。国の方針に反して、各地方自治体が朝鮮学校を各種学校として認可し、支給してきた補助金(額は決して大きくない)が公的な支援だったといえる。このように、朝鮮学校は発足時から現在に至るまで、在日朝鮮人たちの手によって、多くの困難の中で維持されてきた学校だ。植民地期に奪われた朝鮮語を取り戻すという意味においても、そして、その後、在日朝鮮人の日本での永住が前提となった現在でも、朝鮮語で朝鮮人のための民族教育を行う朝鮮学校は、日本への同化に対する抵抗のシンボルでもあり続けている。朝鮮学校は在日朝鮮人自身の運動によって設立、運営されてきた学校だと言えよう。

「1世がつくり、2世、3世が守り抜いてきた学校」という歴史性および特殊性ゆえに、朝鮮学校は、その関係者の間で愛着をこめて「ウリハッキョ」と呼ばれているのである。そして、その学校を「守る」という意識が、現役の生徒たちにも引き継がれている。

その「意志」が存分に発揮されるのは、学校行事の時である。たとえば運動会。運動会は単なる学校行事を超えて、愛知中高学区の在日朝鮮人たちの一大イベントだからだ。北陸、長野、静岡からもバスをしたてて、保護者のみならず、祖父母や親戚までが学校にやってくる。保護者は、豪華な手作り弁当を用意してくる。

生徒たちにとっても一大イベントだ。特に高3は運動会に高校生活のすべてを結集させてのぞむという。競技や行進の練習に余念がなくなるのはもちろんのことだが、放課後に、何度も集会を開いて、「運動会を成功させよう!」とシュプレヒコールをあげている。そこに必ずつくスローガンは「ウリマルをきちんと使って」であり、そして、「同胞のために」だ。このように準備段階から当日の行事を通じて、「同胞との一体感」を体験し、そして、その核となる学校を守っていくという意識が形成されていくように思われる。それは、決して抽象的なものではなく、実体的な「コミュニティ」として体験されているのである。ただし、実際にどう学校を「守る」のかという問いかけに対しては、生徒たちの悩みは多い。おそらく、朝鮮学校をとりまく問題は難問が多すぎて、どうすればいいのかわからないというのが本音であろう。「ぼくらの子どもが通う朝鮮学校はあるんでしょうかね?」という生徒たちのぐちのような一言が、かれらの学校に対する思いともどかしさをあらわしているように思われる。

ある韓国人の研究者は「朝鮮学校が生き残るためには、学校のナショナリズムを捨てることだ。日本にいるのだから、南北の対立を乗り越えた学校をつくるべきだ」¹¹と話していた。確かに理想論ではある。しかし、本国が分断されている中で、日本政府の同化政策や排外主義と闘うために朝鮮学校は「北」側を支持するようになったという経緯がある。国家の対立を乗り越えるのはそれほど簡単ではない。しかし、日本社会でこれだけネガティブに語られる朝鮮に対して、学校関係者はどう考えているのだろうか。次項で論じたい。

(3) 朝鮮民主主義人民共和国（朝鮮）

前述したように、朝鮮学校が正当な国家としてみなしているのは南北朝鮮のうち、北側の朝鮮民主主義人民共和国であり、そして、この政治的立場が日本社会においては攻撃の対象となっている。

しかしながら、この関係には歴史がある。1955年の総聯結成後、総聯傘下として学校が整備される過程で、北側を是とする思想的立場をもつようになった。この学校の立場に正当性をもたせたのが、1957年に朝鮮から送られてきた「教育援助費・奨学金」だった。本国も朝鮮戦争の傷跡に苦しみ、困難な時期であるにも関わらず、在日朝鮮人のために送金してくれたと、朝鮮に対する強い感謝の気持ちが生まれたという。当時、高級部2年生だったJさん（73歳・2世・男）は次の様に語る。

「嬉しかったね、あのときは。（僕は）高校2年だった。嬉しかったね。いやー、国ってありがたいなああって。信頼っていうかね。ちゃんと見届けてくれるっていうね。（北側に対してですか？）そうですね。送ってくれた人にありがとうって言いたいから」

その後、継続的に朝鮮からの送金は続き、2013年にも1億9830万円¹²が届き、これまでの総額は471億2335万390円（159回）になる。このお金で学校の施設が整備され、1970年代には学校の運営費の6割から7割をしめていたとも言われている。朝鮮からの援助金により、在日朝鮮人たちは日本に住みながらも、「祖国」＝朝鮮に守られているのだという実感をもつことにつながった。そして、この話は、朝鮮学校の中で繰り返し伝えられてきた。

「ホントに助けてもらっていたというのを肌で感じていたから。『すごいんだ、お金、くれるんだ』みたいなこともあったから。先生たちから、いくらいくら来ましたと聞くと、私たちは、壁新聞みたいなのを作って、『ありがとうございます』って掲げてやりましたので」（Aさん）

そして、現在でも、生徒たちが「祖国（＝朝鮮）には感謝してもしきれない」と語る。この教育援助費の存在が、朝鮮学校が朝鮮を「祖国」とする大きな根拠となっているのである。

それでは、実際に、個々人にとって、朝鮮はどのような存在なのであろうか。朝鮮はどのように経験され、そしてどのように捉えられているのだろうか。訪朝経験者は、朝鮮学校に出入りしていると数多く出会うが、その経験は一様に「感激」「感動」で語られる。

「初めて共和国を訪問したのは1981年で、21歳のときなんだけど、やっぱり民族教育を受けてきたし、総聯の仕事をしてきたので、北が祖国って、私としては（考えてきました）。船で元山に降りるときに、右（足）で降りるか、左（足）で降りるか、裸足で降りようか、みたいな（ことをみんなで話した）。すごく、よく泣いた。1ヶ月間、いたんだけど、行く先々で、涙が止まらないんです。自分の故郷でもないのに、やっぱり教育って、こういうものかと。学んできたものが全部フラッシュバックするっていうか。生きてるんだな、どこかについて思っ。若かつ

たし、感受性も強かったし」（Fさん）

感動するのは「教育の成果」であり、自分たちが訪れたところ、見たものは限られたものと認識しつつも、「心の中で感動を呼んだ」と語る。それはなぜか。自分のルーツは南側の韓国にあるが、やはり、それまで教科書だけで学んできた「ウリナラ」を実際に自分の目で見ることができたからだと解釈している。

現役の生徒たちも朝鮮に対して愛着を持っている。朝高生活の集大成で、高3生は「祖国訪問」として、2週間朝鮮を訪問する。ほとんどの生徒にとっては初訪朝となる（そして、多くの生徒にとっては最後の訪朝になる）。生徒たちは、空路平壤に入り、朝鮮の海外同胞局の指導員に案内されながら、平壤市内、白頭山や板門店などを訪問する。幼稚園、初級部時代から、繰り返し聞いてきた「ウリナラ」を直接見て、聞いて、体験する貴重な機会となる。日本に戻った生徒たちに感想を求めると、朝鮮での楽しかった思い出を語る。そして、自分たちの目でみた朝鮮を語る。「ウリナラ良かったですよ。確かに、日本の感覚からみれば貧しいです。平壤も頑張っているけれど、経済的にはまだまだ大変。でもウリナラは人がいいんです。国は貧しいかもしれないけれど、あの人たちの心は貧しくない。ウリナラの人は美しい」と。そして、日本に戻ってしばらくは、心の一部を平壤においたままのようにも見える¹³。

生徒たちは朝鮮で何を見て、聞いて、体験してくるのだろうか？ 私も直接観察したいと考え、交渉と予備訪問を重ねて、2013年6月に愛知中高の高3生の「祖国訪問」プログラムに合流し、現地でのかれらの姿を観察させてもらった。

訪問中、生徒たちと行動を共にしていると、生徒たちが朝鮮の人たちに温かい歓迎をうけながら、現地の人たちと交流していることが実感をともなまってわかる。朝鮮に行く前は、朝高生たちも日本が報道する「国際社会から見放された狂気の国家」「よくわからない怖い国」というイメージと学校が教える朝鮮の間で、「どっちが本当だろうか？」と思っていたという。しかし、実際に参観地や訪問地で人と出会い、また、バスの中から手を振ると微笑んで手を振り返す朝鮮の人々の姿に触れ、自分なりの「祖国／朝鮮観」を持つようになるという。そして、朝鮮滞在中は、朝鮮を「祖国」だと感じると話していた。なぜなのか？ 生徒たちの解釈は次の様なものだ。

「（朝鮮を）『祖国』って感じましたよ。ここでは自分を説明する必要がない。私たちのことをわかっている人ばかりに会っているからって言われたら、そうなんです、それでも、ウリナラでは気持ちが楽になるんです」（高3 女子）

「僕らは外国人じゃないんです、ウリナラでは。もちろん、僕は朝鮮では暮らせません。僕はK（チェーンの喫茶店）がないと生きていけない。それはわかっています。でも、ウリナラでは朝鮮語を話していても、女子がチマチョゴリの制服を着ていても、だれも変な目でみない。姉妹校へ行っても、ホテルでも、みんな僕らのことを知っていてものすごく歓迎してくれる。感動しないわけがないでしょ」（高3 男子）

「自分を説明する必要がないから祖国だと感じる」、生まれ育ったところではなく、馴染みのない場所で自分たちは「外国人ではない」と感じるという生徒たちの感覚を理解するのは難しい。私自身、これまで調査で出会ってきた在日朝鮮人は韓国へ行った時のことを振り返り、「韓国でも自分は日本人のように見られた」「韓国では違和感を感じた」などと語っていた。これらの語りの方が、私には理解しやすい。日本で生まれ育って、日本語が母語の在日朝鮮人にとって、韓国も異国だと感じたという話の方がわかるのである。しかし、朝鮮学校の生徒たちは、朝鮮で居心地の良さを感じている。もちろん、朝鮮の政治／社会体制を考えると、生徒たちがそう感じるように「演出」されているのだろうと考える人もいるだろう。しかし、生徒たちは「それはわかっているんです」「どこか『作られた』ものであることはわかっている」と言う。それでも、「朝鮮は外国ではない」と感じるのはなぜか？ おそらく、かれらのこのような感覚は、日本社会の在日朝鮮人に対する処遇と深く関連しているのではないだろうか。かれらは直接的な差別体験は少ないが、日本の在日朝鮮人に対する差別的なまなざしは感じながら生きているのだ。「無償化裁判」でも、ひとりの原告が次の様に意見陳述をしている。

「現在の日本の環境、マスメディアの共和国のバッシングは周囲の差別的な視線の中で在日朝鮮人としてのアイデンティティを確立していくと同時に、在日朝鮮人としての誇りを持ちながら生きていくのは思っていた以上に難しいことだということを実感するようになりました」（『とり通信7号』）

生徒たちは日本社会の在日朝鮮人に対する差別的なまなざしを日常で感じながら生活しているからこそ、「同胞として」温かく迎え入れてくれる朝鮮で感動をするのではないだろうか。

もちろん、生徒たちの中には朝鮮に対して強い違和感を表明するものもいた。それは、指導者に対する距離だったり、日常的な感覚の違いだったりする。

「ウリナラのことを心底イヤだって思った訳ではないんです。でも、指導者の偉大性を何度も強調されるじゃないですか、どこへ行っても。それに対して、理解できないっていう子もいました。で、夜の討論で、向こうの指導員に直でそれを言った子もいるんです。そしたら、指導員の先生、そっから4時間ですよ。ガチの真剣勝負で僕らに挑んできたというか。もちろん、その4時間じゃ、僕らは完全には変わりません。でも、僕は、向こうが主張することもわかったっていうか。あそこが指導者の偉大性を言うのも理解できるんです。でも、同時に、わからないって言った子の気持ちもわかる。両方わかります」（高3 男子）

「姉妹校に行ったときに、向こうの子が私たちを歓迎して、手をつないでくれたり、一緒に歌を歌ったり、ダンスをしたりするの、実は、内心みんな辛いんです。私たちのノリではないから。でも、頑張って手をつないで、歌って、踊るのは、私たちの『意地』なんです。歓迎してくれているのが分かるから、それに応えないといけないって。私たちも相当気を使うんです」（高

3 女子）

生徒たちはこのように様々なレベルで葛藤を経験しながら2週間を過ごす。現地の指導員も交えての討論も繰り返される。このような時間を過ごす中で、生徒たちは生徒たちなりの朝鮮観を形成しているようだ。

「僕ら、実物（朝鮮）を見てるんで。（日本の朝鮮報道を見て）そう思うだろうなっていう部分は、実際、あるっちゃあ、あるんで。全否定ではなくて、ただ、それを違う、違うだけじゃなくて、そういう意見があるけども、これはこういう意図があって、みたいな、そういう自分なりの見解は（ある）。（学校での教育は）基本、いい部分だけを入れるんで。だけど、それだけじゃないだろうし、その裏で何があるのか分かんないですけど。でも（良い部分だけを）教えないと、どんどんマイナスイメージが増えてきますから、この日本では。そうなんちゃうのは当然なんです」（20歳・3世・男 朝大2年）

4 まとめにかえて

本稿では、愛知朝鮮中高級学校でのフィールドワークから、当事者たちにとって朝鮮学校がもつ意味を描き出してみた。朝鮮学校の生徒たちの「明るさ」の背景にあるものは何か？それを考察することを通じて「朝鮮学校に通うことに意味」を探りたいと考えた。

朝鮮学校では、朝鮮語、朝鮮歴史、朝鮮地理、現代朝鮮歴史などの「民族科目」を基盤にしつつ、朝鮮の価値観を教える。さらに、生徒たちは、朝鮮語ができるという自信に加え、幼少期から朝鮮舞踊や朝鮮の歌、朝鮮の楽器に触れる機会も多く、日常的に朝鮮人に囲まれて成長していくという経験を通じて、「自分は朝鮮人なのだ」という肯定的なアイデンティティを自然に培うようである。

さらに、朝鮮学校は1世たちの手によって、日本政府からの過酷な弾圧にも負けずに朝鮮学校が建てられたことに対する感謝、そして2世たちによって学校が維持され、3世、4世の自分たちが今学ぶ場所に感謝するという物語も学校の中では繰り返される。実際に、1世たちがお金のみならず、手作りで校舎を作ったという話は関係研で在日朝鮮人の生活史を聞いているときにも何度か出てきた。さらに2世たち（今の保護者の親世代）で、自営業等で成功した人たちが巨額の寄付¹⁴を学校にした、当時から給料が十分に出なかった教員たちを頻繁に家に招いて食事をさせたなどの話もあちらこちらで聞いた話である。それらの話は、感謝の物語であると同時に常に日本社会への抵抗のシンボルでもあるのだ。日本は何もしない、弾圧しかしてこなかった、ならば朝鮮学校は私たちが（ウリキリ）で守り続けるのだという意識は世代を超えて受け継がれている。

こうした中で、生徒たちは強い仲間意識（朝鮮学校コミュニティ）を持つようになり、また、保護者たちも朝鮮学校に通う生徒たちを学齢期前から知っていて、非常に親密な関係の中で12年（またはそれ以上）を過ごすことになる。おそらく、ある生徒にとっては煩わしく、息苦しい側面もあるだろう¹⁴が、それでも生徒たちは「守られた空間」（safe home）の中で、朝鮮人であることを否

定される経験もなく成長していくのだろう。

このような朝鮮学校を日本政府は、一度も支援してこなかった。そればかりか、朝鮮学校の存在を否定するような政策をとり続けてきた。朝鮮学校と朝鮮や総聯との関係を問題視し、政治化させ問題化させていく。その関係の何が問題なのかについて論理的な説明はないままだ。朝鮮学校が設立された経緯、朝鮮学校が現在の政治的立場を持つようになった経緯には、日本の植民地支配という歴史が関係している。この事実を顧みることなく、日本政府は朝鮮学校を否定しつづけているのである。それは、結果として、朝鮮人が朝鮮人として日本社会で生きていくことを否定することにつながっている。

〈家〉——愛知中高が選んだ2013年の〈今年の漢字〉である。本稿でも論じたように、朝鮮学校こそが「居場所」であり、自分たちが日本社会で堂々と朝鮮人として生きていくために自分たちを育てて、守ってくれる場所という意味なのであろう。現在、日本政府が、そして多くの地方自治体が行っている朝鮮学校を排除する政策は、このような在日朝鮮人にとっての「家」を攻撃していることを意味しているのだ。朝鮮学校をめぐる処遇は、日本の移民政策のあり方を問いかけている問題でもある。

- *1 拉致問題等、朝鮮との政治外交上の問題を理由に「高校無償化」から朝鮮高校のみを排除している。このことをきっかけにするようにして、地方自治体も補助金支給を停止しはじめた。東京（12年から）、大阪（10年度から高校、11年度から全校）、千葉（11年度から）、宮城（12年から）、埼玉、神奈川、広島、山口（13年度から計上せず）に加え、市レベルでも大阪、横浜、川崎などが補助金を停止した。
- *2 無償化排除に関する下村博文文科大臣の考えは次の通りだ。「朝鮮学校については、朝鮮総連と密接な関係があり、教育内容、それから人事、財政にその影響が及んでいることなどから、『法令に基づく学校の適正な運営』という指定基準に適合するというには当てはまらないということが1点。それから、省令改正により指定の根拠となる規定を削除した。このことによって、昨年2月20日付けで不指定処分を行ったということで、この処分を変更する予定はありません。」（下村博文文部科学大臣記者会見録、http://www.mext.go.jp/b_menu/daijin/detail/1343111.htm 2014年1月8日閲覧）
- *3 たとえば、『産経新聞』は、かなり頻繁に朝鮮学校を批判する記事を掲載している。
- *4 『朝日新聞』『毎日新聞』などの記事。例えば、自民党が正式に朝鮮高校を無償化の対象にしないと発表した2013年2月20日前後にはこのような論調の社説が掲載された。
- *5 朝鮮への同行調査の実現までにはいくつかの制度的困難があった。2012年は6月15日～21日まで、合計4回のプログラムに同行し、2013年は6月10日～22日まで、可能な限りのプログラムに同行させてもらった。
- *6 谷富夫を研究代表とする研究チームであり、1993年から1997年まで一回目の調査を行った。大阪都市圏に住む在日韓国朝鮮人4親族合計57名の生活史を聞いた。その成果は『民族関係の結合と分離』（ミネルヴァ書房、2002）として出版された。関係研のデータは「（関係研 X2）」というように示す。
- *7 「高校無償化」から朝鮮高校生のみを排除したことは違憲だとし、国家賠償請求の裁判を2013年1月24日名古屋地方裁判所に対しておこした。さらに2013年12月19日に第二次提訴を行い、現在は合計10名の原告がこの裁判を闘っている。
- *8 『とり通信』は「朝鮮高校にも差別なく無償化適用を求めるネットワーク愛知」（裁判支援を中心に活動をしている市民団体）のニュースレター。バックナンバーは<http://mushouka.aichi.jp> でみることができる。
- *9 在日朝鮮人の呼称をめぐってはいまだ議論が尽きない。在日韓国人、在日韓国朝鮮人のほか、近年は在日コリアンという用語も定着しつつある。しかし、本稿では、あえて、「在日朝鮮人」とする。言語も同様に韓国語、コリア語などとも呼ばれるが、本稿では「朝鮮語」とする。

- *10 愛知中高に代々伝わる先輩―後輩間のルールは多い。例えば、学校の最寄り駅までの名古屋鉄道の列車。学年毎に乗る車両が決められている。さらに、駅から学校までの道も学年毎に決められている。生徒によると、そのルールを守らないことは「死刑宣告をされるようなもの」だそうだ。そのほか、学校内でも様々なルールがある。
- *11 2013年11月26日に韓国のソウル大校日本研究所が主催する専門家セミナーに招聘され「在日朝鮮学生における〈祖国〉の意味」というタイトルで発表を行った。その際、フロアにいた韓国人研究者からのコメント。類似のものは3人から受けた。
- *12 『朝鮮新報』インターネット版、2013年4月8日。
- *13 韓国の映画監督・金明俊が撮ったドキュメンタリー『ウリハッキョ』（2005年）でも、朝鮮から帰ってきた生徒たちがそれまでと違ってみえたと言っている。
- *14 千万円単位から億単位の寄付をした人もいるそうだ。
- *15 何人かの生徒が電車の中で学校での息苦しさを語ってくれた。学校の雰囲気違和感を感じ、「朝鮮も大嫌い！」と語る。また、政治学習をする「学習班」に誘われても「全力で断りました」と言う。しかし、そんな生徒も日朝間の摩擦がおこり、通学路で言いがかりをつけられると、猛然と抗議していた。

【参考文献】

- 板垣竜太、2007「朝鮮学校を支えるということ」『法学セミナー』2007年7月号
- 板垣竜太、2008「朝鮮学校の社会学」（同志社大学社会学部社会調査報告書）
- 板垣竜太、2013「資料：朝鮮学校への嫌がらせ裁判に対する意見書」『評論・社会科学』同志社大学人文学会
- ウリハッキョをつづる会、2001『朝鮮学校ってどんなところ？』社会評論社
- 小熊英二・姜尚中編著、2008『在日1世の記憶』集英社新書
- 小熊英二、2013「点と点をつなぐ」『信濃毎日新聞』2013年10月15日
- 小沢有作、1973『在日朝鮮人教育論―歴史編』亜紀書房
- 韓東賢、2006『チマチョゴリ制服の民族誌―その誕生と朝鮮学校の女性たち』双風舎
- 金尚均、2007「民族的尊厳の回復としての朝鮮学校」『法学セミナー』2007年7月
- 京都大学教育学部比較教育学研究室、1990『在日韓国・朝鮮人の民族意識―日本の学校に子どもを通わせている父母の調査』明石書店
- 金泰泳、1999『アイデンティティ・ポリティクスを超えて―在日朝鮮人のエスニシティ』世界思想社
- 金漢一、2005『朝鮮学校の青春―ボクらが暴力的だったわけ』光文社
- 高全恵星監修、2007（柏崎千賀子訳）『ディアスポラとしてのコリアン―北米・東アジア・中央アジア』新幹社
- 権康寅、2007「帰属とアイデンティティの分化と統合」伊藤亜人・韓敬九編著『中心と周縁からみた日韓社会』慶應義塾大学出版会
- 宋基燦、2012『「語られないもの」としての朝鮮学校―在日民族教育とアイデンティティ・ポリティクス』岩波書店
- 田中宏、2013『第3版・在日外国人』岩波新書
- 田中宏、2013「朝鮮学校の戦後史と高校無償化」『〈教育と社会〉研究』第23号、一橋大学〈教育と社会〉研究会
- 谷富夫編著、2002『民族関係の結合と分離』ミネルヴァ書房
- 曹慶鎬、2011「在日朝鮮人コミュニティにおける朝鮮学校の役割についての考察」『移民政策研究』第4号、移民政策学会
- 中島智子編、1998『多文化教育―多様性のための教育学』明石書店
- 中島智子編、2011「朝鮮学校保護者の学校選択理由―『安心できる居場所』『当たり前』を求めて」『ブール学院大学研究紀要』第51号
- 中島智子編、2013「朝鮮学校の二つの仕組みと日本社会」『〈教育と社会〉研究』第23号、一橋大学〈教育と社会〉研究会
- 朴三石、1997『日本の中の朝鮮学校』朝鮮青年社
- 朴三石、2011『教育を受ける権利と朝鮮学校―高校無償化問題から見てきたこと』日本評論社
- 山本かほり、2013「朝鮮学校における『民族』の形成―A 朝鮮中高級学校の参与観察から」（『教育福祉論集』第

61 号, 愛知県立大学教育福祉学部紀要)

- Ryang, Sonia, 1997 *North Koreans in Japan: Language, Ideology and Identity*, Boulder, Co: Westview Press

本研究は科学研究費補助金基盤研究 C「朝鮮学校における『民族』の形成・変容のメカニズム」(研究代表 山本かほり) の成果の一部である。

What It Means to Learn at a Choson (Korean) School

YAMAMOTO Kaori

Aichi Prefectural University

Key Words: Zainichi Koreans, Choson school, Korean identity

Simply considered pro-DPRK schools today, Choson (Korean) schools in Japan originated as non-partisan Korean-language schools for all Korean minorities in Japan in 1945, immediately after the liberation of the Korean peninsula from Japanese colonialism. After years of assimilationist colonial policies, the aim of these schools was to teach Korean language and culture to Korean children remaining in Japan. Still a critical alternative to Japanese public schools today, their primary purpose remains to instill pride in ethnic Korean identity in Japan.

After the Korean War, Choson schools have had institutional ties with the DPRK. With this background, and with an increase in North Korean phobia in Japanese society, Choson schools have experienced political attacks and cuts in the financial support that local governments provide to private schools.

Despite these difficulties, students at Choson schools remain optimistic. And parents who want their children to grow up “Korean” continue to support Choson schools. Based on my own participant observation at the Aichi Choson School since 2011, I explore what is behind students’ and parents’ motivations in supporting Choson schools, and what the Korean “homeland” means to them in light of widespread aversion of the DPRK in Japanese society.